

基本色は好まれるか？

NCS Elementary Colors are Preferred.

近江源太郎 女子美術大学 Gentarow Ohmi

1.はじめに

色彩好悪に関する実験美学的研究は、1894年のChonに始まるとされる。その後、1世紀を経て、Katz(1999)は大意次のように総括している。「色彩理論研究のうち、美の問題にかかわらない分野は長足の進歩を遂げている。しかし残念なことに、色彩好悪の方は、理論をともしなわなない単なる経験的データが、脈絡なく大量に蓄積されてきたにとどまっている。」こうした状況を招いた理由は、いくつも考えられる。“好き”“美しい”などのことばの多義性やあいまいさもあるし、あらゆる文脈から切り離して抽象的に好みを問うという方法論にもデータの不安定さをもたらす原因はあろう。しかし、調査によって目的が異なる点も、「脈絡」のない蓄積を生む原因でもあろう。①好悪・美醜の法則を色属性との関係で定式化する。②個人差、集団差、時代差に着目して、パーソナリティや文化と結び付ける。③品物・環境・作品など、特定の物や色彩使用意図との関係で、“好まれる色”をさがそうとする。など多様な接近がなされてきた。

しかし、①の快不快進んでは好悪と色彩尺度との関係の定式化は、好悪実験の当初からの命題であるし、「大量に蓄積」されたわりに実りは乏しいけれども、この命題がデータのうえでも論理的にも却下されたわけではない。そこで本報では、NCS色相と好悪との関係を検討する。“心理的”に構成されたシステムであれば、高次な心理反応である好悪を、他のシステムより単純に説明するのではないかと期待できるからである。

2.方法

色見本を提示して、好悪判断を求めた。色見本は、NCS 2editionの色み量の多い色の色相環見本から、色み比率0、20、40、60、80の計20色と無彩色3色を用いた。尺度は＜好き－嫌い＞の7段階設定尺度。被験者は、19才から65才までの日本人男女67名。1999年8月に集団法で実施。

3.結果と考察

色見本ごとに、集団の平均値と標準偏差とを求め、分析の対象とした。結果を図1に示した。

3.1 NCS基本色は好まれる

グラフは一見不規則であるけれども、基本色YRGBそしてWSが、近隣の色にくらべて好まれている。つまり、「NCS基本色は好まれる。」という単純な法則性を見せている。

用いた色見本には、黒み量や色み量に若干の差が含まれている。そこで念のために、それらと好悪尺度値との関係を見ると、いずれも表1のように無相関である。そして、色み比率50からの色相差との間にのみ高い有意な相関関係が認められる。色相が好みを規定しているのである。ちなみに、換算したマンセルの明度および彩度とも無相関である。またマンセルの主要5色との色相差も好悪尺度値とは無相関である。したがって、NCS色相のみが規定力をもつことになる。なお、マンセルの5BはNCSのBよりもかなり緑寄りであり、あくまでもNCS基本色の方が好まれている。さらに、マンセルの主要5色にはPが含まれるが、好悪に関するかぎり他の主要色と同列ではない。黄赤青緑のヘリングの心理原色から展開された4色が好まれるのである。

3.2 色彩好悪の個人差の問題

20色×67人の生データを因子分析すると、固有値1を基準にして、4因子が得られた。第1因子の負荷量は、上述の好悪尺度値に一致しており、共通因子とみなしたい。第2因子以降は、特定の色を好むというよりも、ある広がりをもって中間色相を好ま

表1. 好悪尺度値と色属性との相関係数

	NCS		マンセル
黒み量	-.09	明度	.34
色み量	.25	彩度	.10
白み量	.03	色相差 ²⁾	-.17
色相差 ¹⁾	.74**		

1) NCS色み比率50からの色相差

2) マンセル5主要色の中間の色相からの色相差

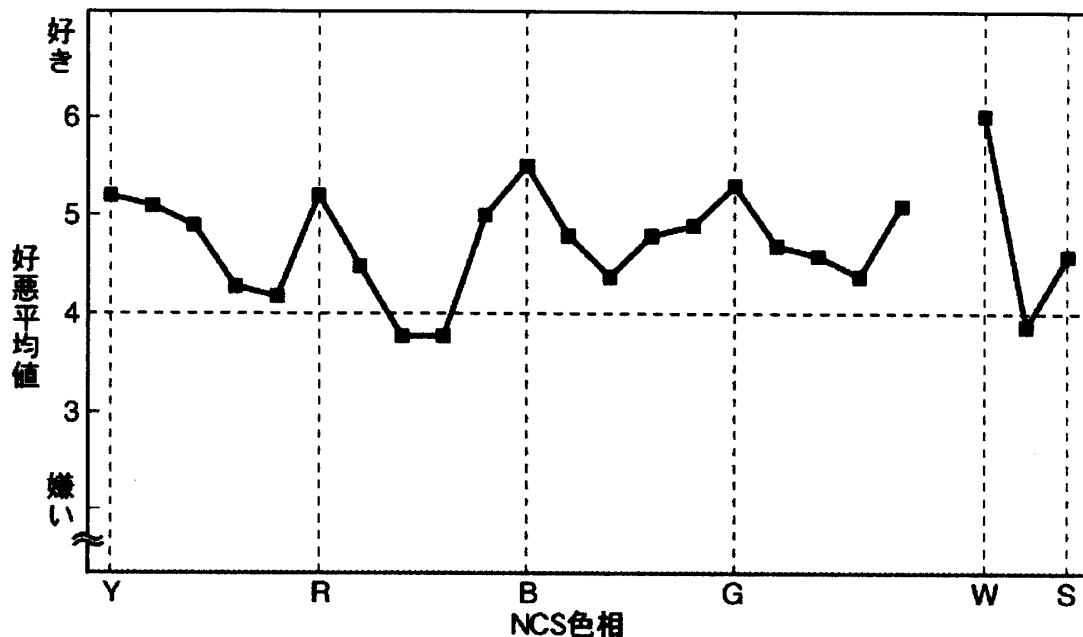


図1. 色相好悪尺度値

ない、という形をとる。第2因子は黄緑と黄赤、第3因子は青緑、第4因子は赤青(紫)をそれぞれ好まない。少なくとも、第2因子以降に基本色を嫌う傾向は認められない。

ところで、今回の好悪尺度値の示したような傾向が、従来のデータで頻出しているわけではない。その理由は、次のように理解したい。集団の代表値は、4因子が合成されている。したがって、集団の中で4タイプの人口比が異なれば、代表値も変化し、必ずしも基本色嗜好は表面化しない、と。

3.3 若干の傍証

基本色相への好みは、過去のデータからもうかがえる。図2は、日本人を対象とした大規模なサンプリング調査であり、色見本も75色用いられている。個々の色見本ではなく、トーンをまとめて色相としての好みをみると、少なくとも中間色相への消極的な反応は確認できる。この種の方法による初期の調査例(橋本・相馬 1956)でも、同様に集計すると、類似の傾向が読みとれる。

表2は、日本色彩研究所が1955年以来続けている女性服装色の実態調査からとった。同調査は系統色名で整理されているため直接的な比較はむづかしいが、平均出現率の低位はいずれも中間色相である。Fechner流に言えば使用法ということになるが、33年間の実態の重みは貴重であろう。

4. おわりに

NCS色相についての好悪調査から、基本色は好まれ、中間色は好まれにくいという結果が得られた。NCS色相尺度構成の発想と併せて考えれば、「色彩好悪」には情緒の水準以前に、視覚系の神経生理的

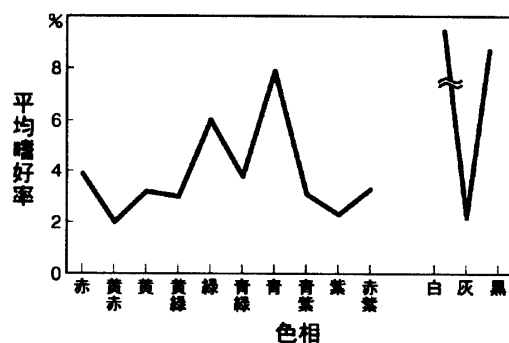


図2. 過去の色彩好悪調査データから

表2. 女性服装色実態調査で出現率が低い色 (33年間平均1%未満 春秋共通)

オリブグリーン	イエローグリーン
ターコイズ	ブルーグリーン
バイオレット	ライラック
ラベンダー	

な仕組みに規定されるところがある、とみなしたい。情緒的要因の存在を否定するわけではないけれども、好き嫌いの反応には、神経系の仕組みに支配された視覚的な快不快が含まれる。換言すれば、視覚系の仕組みに合致した色は、快さをもたらす、と考えたい。もちろん色の“よさ”が直接的に基本色に規定されるわけではなく、たとえば“面白さ”や“楽しさ”にはこうした快からのズレが反映するのではなかろうか。中間色相の発掘である。今後blue seven phenomenonならぬelementary color phenomenonを、命名や記憶色など認知レベルの問題について、また文化比較などから検討できれば、と考えている。